

# 『福島復興の力になりたい…』

川内の大山康弘さん・



福島復興のために資格を取った重機の前で大山さん

川内村の大山康弘さん(27)は、昨年十二月から南相馬市に住み、新地町と相馬市の沿岸部のがれき撤去の仕事をしている。「福島の復興のために自分も役立ちたい」と、左腕の障がいを乗り越えて重機の運転免許を取得。現在は朝早くから日暮れまで、街が元通りの姿を取り戻すために汗を流す毎日だ。

大山さんは富岡町の碎石会社に勤めていた。震災当日は勤務中だったが、すぐには帰宅となつた。翌日から船引、数日後に埼玉へと親類の家を頼つて避難した。

弟の高校が再開するのに合わせ郡山市の借上げ住宅に入居したのは昨年五月の上旬。だが何もすることがない日々が続いた。ある日、テレビを見ていると一面に広がるがれきの山が映つた。その光景を目にし「自分も何か役立つことがしたい」と思つたという。

そんな時、勤めていた碎石会社から「相馬でがれき撤去の仕事があるから、重機の資格を取らないか」と

大山さんは富岡町の碎石会社に勤めていた。震災当日は勤務中だったが、すぐには帰宅となつた。翌日から船引、数日後に埼玉へと親類の家を頼つて避難した。

弟の高校が再開するのに合わせ郡山市の借上げ住宅に入居したのは昨年五月の上旬。だが何もすることがない日々が続いた。ある日、テレビを見ていると一面に広がるがれきの山が映つた。その光景を目にし「自分も何か役立つことがしたい」と思つたという。

そんな時、勤めていた碎石会社から「相馬でがれき撤去の仕事があるから、重機の資格を取らないか」と

大山さんがハンディキャ

操作ができるだろうか?」。

でも会社側は大山さんの日頃の勤務態度を評価していただからこそこの誘いだった。教習所の人も「(障がいにかかわらず)レバー操作ができる資格は取れる」と励ましてくれた。見事資格を取つて、現在の仕事に就いたのは昨年十二月のことだ。

大山さんは「年齢に関係

球好きで、四人兄弟そろつて小さい頃からよく野球をして育つた。小学生の時はソフトボールでピッチャーとして活躍、球速は百二十キロを記録した。高校では野球部でピッチャーや外野でレギュラーを務めた。大山さんは「年齢に関係なくみんな同じラインでプレーできる仲間です。わきあいあいとやつてました」と振り返る。現在は仕事が忙しくて練習に参加できないが、全国大会で優勝する夢は変わらず持ち続けている。毎年川内村ではお盆に野球大会がある。去年は避難先の郡山市の開成山球場で

飛ばされることもあつたが、チームメイトが支えてくれた。

「若い人たちが戻れば必ず福島は元に戻ります」困難の乗り越え方を知っている大山さんは静かに、でもは

の開催となつたが、兄弟四人揃つて参加することができた。障がいがあつても、好きなことに一所懸命に打ち込めば、応援してくれる仲間ができ、道が開けることを大山さんは野球を通じて知つていた。

がれきを全部片付けるには五年から十年かかると言われている。毎日がれきをひたすら重機のアームで挟んでダンプに載せていく。

慣れない仕事だが、ダンプの運転手も「何事も練習だから」と声をかけ見守つてくれる。ここでも仲間に恵まれた大山さん。しかし、

たから平気だった。社会人になつてからは、県の障がい者の野球チームに入つた。

チームメイトは三十〜五十一歳で大山さんが一番若い。

毎年神戸で開かれる全国大会では二〇〇八年にピッチヤーで準優勝した。チームの信頼は厚く、みんなから「やつち」と呼ばれてかわいがられている。

大山さんは帰村宣言をしたが、村から作業現場までは通えないため、大山さんはすぐに村に戻ることは考え

年かかつても復興に関わり続けて「いつかがれきが無くなつて笑顔で帰れるようになつたら、川内村で高校の友人たちと会いたい」と

故郷を思う。

「若い人たちが戻れば必ず福島は元に戻ります」困難の乗り越え方を知っている大山さんは静かに、でもは

つくりと語つてくれた。

がれきの撤去で活躍中

# 障がい乗り越え重機免許取得



福島の復興のために頑張る  
大山康弘さん

# 糸新聞 最終号

避難している人 みんなの情報紙



がんばろう福島!  
“糸”づくり応援事業  
福島県委託事業

<糸新聞編集室>  
〒963-8835  
福島県郡山市小原田2-19-19  
TEL024(944)0083  
メールアドレス  
kizuna-fp@utsukushima-npo.jp

<受託・発行>  
特定非営利活動法人  
うつくしまNPOネットワーク

<糸新聞(Web版)>  
糸新聞 検索

2面 ●連載「再始動の軌跡」④  
~飯館の伊藤明美さん  
▼いわきの鈴木一好さん  
▼大熊の武内一司さん久美香さん夫妻  
▼浪江の武内幸雄さん

3面 ●中島村に小さな畜産の飯館村  
●富岡出身の高野さんいわきで再出発

|| 今月の紙面 ||

## 本紙連絡先

024(944)0083

✉ (メール)  
Kizuna-fp@utsukushima-npo.jp



## バックナンバーの購読について

「3.11」から一年が経ちました。最終号をお届けします。創刊号からのバックナンバーは、ホームページで読むことができます。糸新聞(Web版)です。アクセスしてみてください。また、バックナンバーが必要な人は、編集室にメールでお問合せください。残部がある号につきましては、お送りします。(送料は負担していただくこととなります。)

糸新聞編集室アドレス  
kizuna-fp@utsukushima-npo.jp

「何年かかつても成し遂げて笑顔で村に帰る」